



問答

洋学文庫  
文庫8  
C 181





明治二年官許

加藤弘蔵著

交易問答

全二冊

東京谷山橋蔵板



41-6630

小序

先年一未懐忱の士務操を唱ふの  
餘動もすはる迄激れ筆勅を以て國  
家の煩を去る者方かに其言一  
操の論を夏玉より出づ其志は嘉に  
この下も甚だ勢ありて聞あり者ふ



井蛙の倂見多きを免さす一是故に今  
夜

物取一新の村も有りても敢て其論を  
採り玉を以て更らるる各國と條約を結ぶ  
是市場を恒加しまたく貿易を廣く  
せんし玉も唱呼善ありしごとく

これら仍舊況を株寄し一頑論を主張  
する者少くはに如く市井の細民も  
高銀擡を是として通商を疎すは  
十の七八は中は其甚しきに及りては  
洋言を見ても習を強り目を起し  
て相向ふ者殆ど地所さらすなり一是ら



一 古廣禁をきり一 玉ふとくとも  
家焼戸論人こ心給よむくすれを其契  
逐よ除りてくまにま顔諦僻見の國家よ  
裏阿ふを因より辨を候す一と明な  
もく細文の齋施より事一 理を篇一とるも  
前口話坐の論の如き亦天中の事一 二集

一とふふかすすか々 皇學大に改無  
一 古人の此書よ志に若くに書かれも  
新詔大和魂のかき固陋は細かきもの  
非さを知りてむく開談の可香侍人を  
も細明すくをほて意来の神にむく  
陰せんも豫め初は一と符を唯知て表



之きは細成の御見のみ細氏因より  
筆より迄するの日なれば能く開鎖の海矣  
を福——族編を棄るの時か——ん余之を  
意ひ細成を——て和用歟の利之善を曉る  
——知んて歟すの老學の心より——之後此一小  
冊を著——以て世に公するせん——に唯其父

或作者は倣ふそのの如く大方れ安きを  
免れず——とる固より此書を著すにの意  
時を夫婦を教諭するよりして敢て士  
人——示さるる為り——あき破をたし

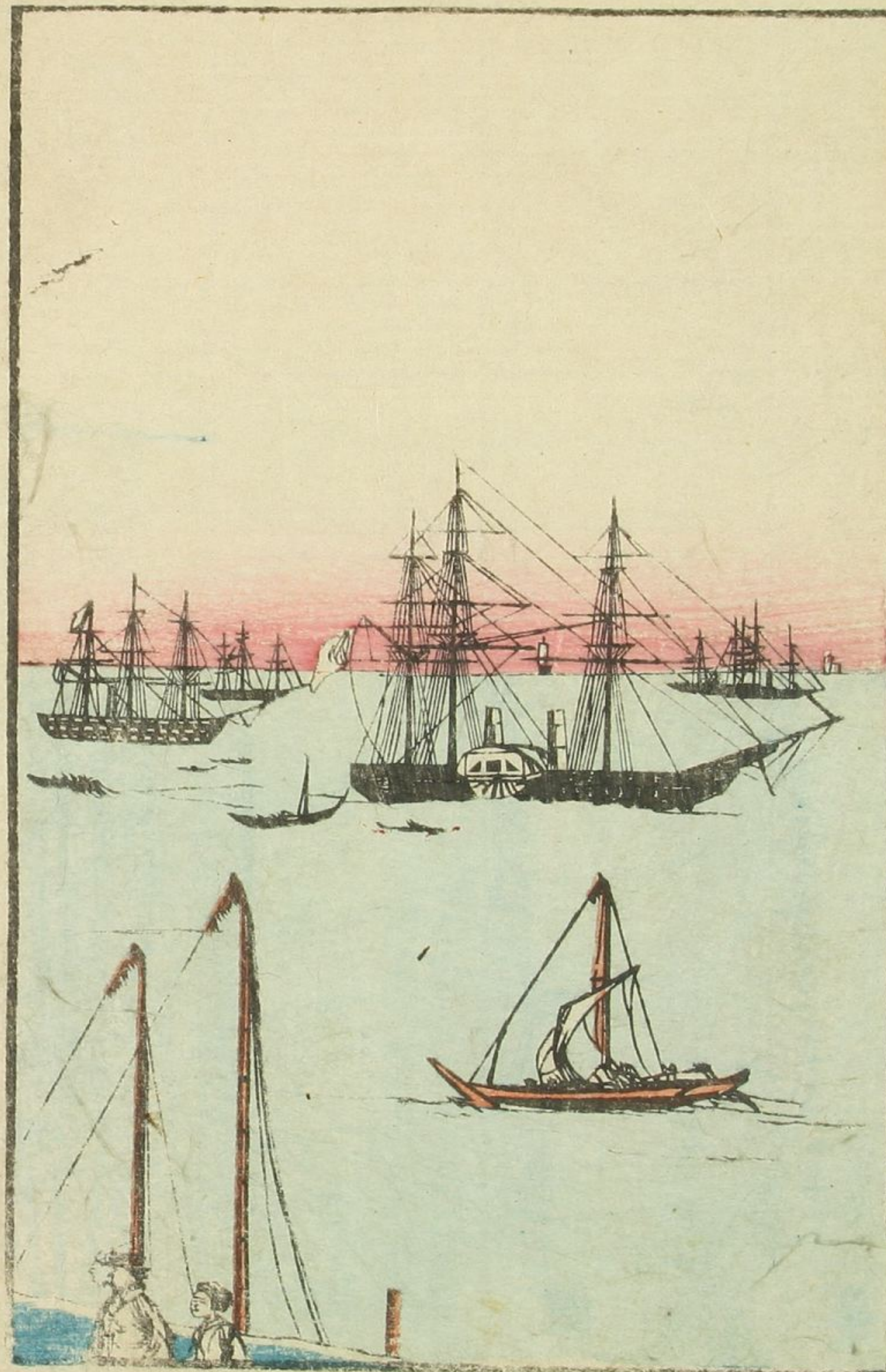
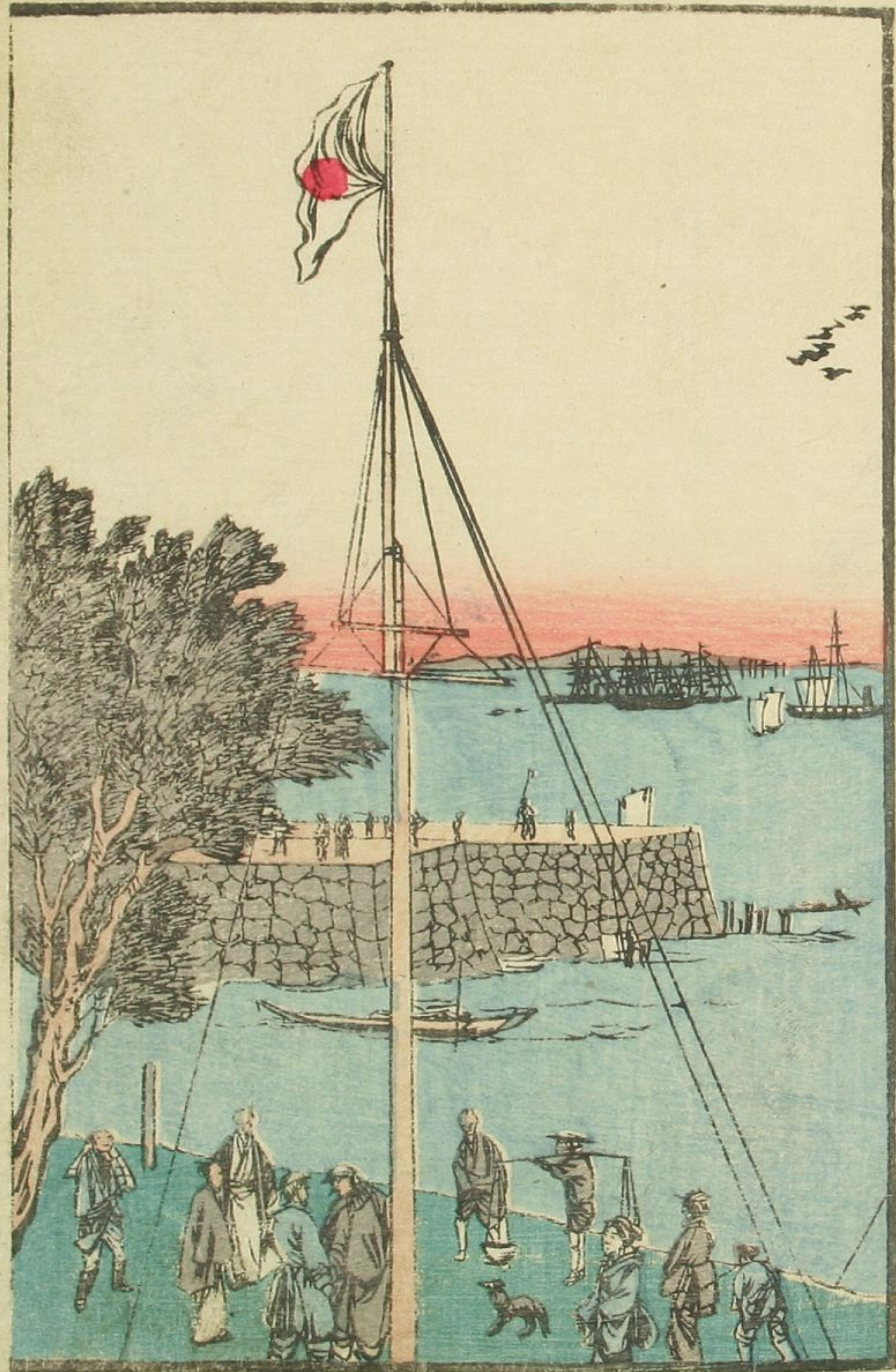
明治二年己丑四月

加藤知蔵徳

小島廣書

序









交易問答卷之上

加藤弘藏著



頑六

ナント才助君僕ハ一向合点の参り申  
 さぬとんござる。今度此公儀と申は者  
 がなくるつて。天下の政事ハ  
 天子様でるさる振るつて。是迄  
 此公儀と可愛かりあつて醜夷等ハ



才助

頑六

圖



遊は海拂攘ふるるごろうと思て亦ぐ  
居まゝさら。矢張以先の公儀と同  
ごとく。加う大坂や兵庫も交易場  
は開きよあり。又東京でも交易と開  
さふさるといふ。何するごとくござらう。  
どふもは頑六杯も一向合点が参り  
申さん。或先生のお話よ。元來は日本  
といふは五ハ神國でござるらう。日本

人の知恵といふ者ハ申く 醜夷等の  
及びもあいらど。物事何も角も千  
と傳つて。何事不足のあいらど。世  
界隨一の玉ござる。そこで怨  
の深い醜夷等ハ己が玉が悪國で。物  
も何も角も不足ごらけごあごらう。世界  
中の國くらら。唯喜々の日本玉は  
目掛て來て。彼奴等が國の何の益

卷上

七



も立ない品物と持越して。日本の  
結構な品と買出。かひく日本の  
諸品と買ひて。日本人と弱らせ。  
結局は日本の諸國迄も。彼奴等が  
物と志やうと。いふ不届子ある企を  
するの。でござる。夫故近年。諸色  
あひく拂度よろらて。壺屋ハ日々の  
格より。何でも三増倍や四増倍

よるらるるい物のあいといふハ。思へを  
いふ何さる世の中。でござる。いふ  
いふもみんな醜夷等が仕業でござる。  
是れ社悉い醜夷等と。何ぞ  
天子様ハ大事よあさつて。彼奴等がい  
小通りよあさるでござる。中ら。僕等の  
根も三錢よもあらるい老耄翁も。  
實に切齒やう下とさる。ナント才助君。

卷上  
三



そりうでいござらんろ。

才助

頑六君足下ひどく交易のゆりところ  
くいひるさるが。僕よハ足下の理窟  
ハ一向かりません。僕ハ或先生の由話  
と毎度聞ま〜さか。交易といふものハ  
あ〜てあ〜るいりのごそりうでござる。  
なせといふよ其證據よハ先ツけ世界

の閑け始まり時分を農業比道ハ  
勿論衣服を製へることをか〜。況  
て家を建るといふこともな〜さか。  
其後神様のおうげ〜。おひ〜  
農業の道もひらけ。又どう〜り  
衣服をあら〜ら〜る〜と知り。衣  
を建ることふども閑けこのぶそら  
〜あ〜ざる併其も〜めを各人お農

才助



業も志しり。衣服も製へ多り。家も建  
 るとつふやうふことゆゑふりく  
 手廻りかねく。加之何も角もよいこ  
 ととも出来まんごことし。見え。皆あ  
 ぐす。さきツの知恵がでて。各人小何  
 も角もすはのをやえく。壁へをき人  
 を農業をして。稲麦を作り。又き人を  
 家も建るのを家業とし。今き人を衣

服を製へるのを家業ふすはとつふ  
 格ふ。其外すべくいろくの家業を  
 分けて。各人其家業むかりに精出  
 て。壁へを農業をして。稲麦を作る者  
 を。自分と其女房子の多る。づけ貯  
 へく。其餘も人の製へる衣服や。又  
 人の建る家柄と取らへ。す。家を建  
 る家業のものも。人の家を建てやる



代りふを。其人の作りと稲妻との。ま  
とを製へと衣服とのを。貫ふとつふ  
括ふあつとをものぐ。是が即交易の始  
まりとさうとさうとさう。今を交易とさ  
へいへも。西洋人の品物を日本に買入  
て。又日本の品物を西洋人に賣るる  
事りの括ふ思ふけれど。決してさうでハ  
あ。其標ふ人こそが自分のあしらへと

おと。人のこしらつと物とを取りつる  
ら。交易といふのでござる。そこで  
又あひく。甚か開けて。お業もごんく  
分れて多くあり。盛るもるる又従て。  
自分づゝ所く方く。駈まらつて。物と  
おとと交易する括でハ。それ又時間  
が費て。又其お業かはうどらす。誠と  
不便利とあつとりのござら。そこで其



中よ這入て。双方交易の紹めとして。  
利と儲るのと家業とする者が出来  
ま—。是か即商人の始りぞるうで  
ござる。は商人といふ者が出来た。  
百姓ハ農業斗と。又職人ハ各人其  
家業さへして居れた。商人がまぢ  
たいつてことへは稲ハの作つて稲  
麦と。糸助の方又持参りて。糸助の

製つて衣服と取りつて。其衣服と又  
稲ハの方又持参り。或ハ稲ハの方又  
てハ。衣服八十疋由。最早不用るれ  
ど。傘が入用由。傘四五本持て参  
つてくれろといへば。又其衣服と  
笠傘が方又持参りて。笠傘の製  
つて傘と取りかへて。其傘と稲ハ  
が方又ゆらとりか振。すべて徳人



の便利なる格よーして。其代よハ  
其世話料。縮ハガ方よて縮麦  
少く。糸助ガ方よて衣服一二枚。  
笠平ガ方よて傘一二本と貫て。  
其内不用るあがあれバ。又入用  
るおと取らつ採して蓄て居ら  
りれと見つる。それくら又世ガ  
ごん開て。お業も教るよこられ。

乾てハ商人の仕事も遠く無名  
よなるよ従て。何かよもおとあ  
と取らつる格でハ。誠よ不都合で。  
譬へて穢あ屋の掬助ハ。酒を  
飲けれど。自分ノ穢つと反お  
を反と。酒を外の各うつハ。不  
均で出来ず。されをよく反お  
と切りてハ用よ立。又穢屋の



半口亭ハ。紙と砂糖と名くるとけ  
れど。砂糖を比其差ハ。紙と取  
る事と好まぬとりふ振る事が  
出来て。何分又も不都合なる事  
起つ。左そこで妻好代  
知恵が。出て。清上で通用金と  
りふ者と。とらつて。物とあ  
と名くする代り。ハ通用金と用

る振として。下さつ。さりのとら  
ハ通用金といふ者が出来。左職  
屋の。村助ハ。自分。で。職。と。反。お。と。最  
初。ハ。通用金と。名く。して。と。け。バ。  
熊。と。反。お。と。持。出。さ。ば。と。も。ハ。通用  
金。で。酒。を。外。あり。と。二。升。あり。と。勝  
手。次第。と。買。ふ。事。が。出来。又。紙。屋。の  
半。口。亭。も。最。初。と。名。く。と。通用金と

巻上



なうしておけば。其通用金で砂糖を  
行ふりと二行ふりと。只も社求る  
るが出来る程なるりよ。そこ  
で酒屋でも砂糖屋でも。自分の品  
あとい通用金と云うて賣ること  
有。以てああと物とと交易し。時  
とハ都合がくるりて。明日並  
け通用金で塩と買ふと味噌と

買と。但しハ来年先來年延貯て  
置と。勝子次第よるりて。酒や肴の  
程又賣るり。此でも有。又稲や麦  
の程又大きふと。穀は積むも及  
ど。とんご都合のよい事よるり  
ので。それより高賣かすこと  
盛よるりて。来々。い。程よ通用金  
が出来て。それで高賣をとるり



るつこりれど。しる米と取らんこ通  
用金ハ。又明白衣服と取らんこり。  
乃至米俵取らんこり。又ハ糸の糸と  
取らんこり。何道よこ糸の款しと  
取らんこり。取らんこり。取らんこり。  
取らんこり。取らんこり。取らんこり。  
取らんこり。取らんこり。取らんこり。  
唯ハ物が出来て減は其取らんが便利

よるつこのびそそで始て賣買と  
りふ名つこさすーさか。寧ハ矢張五  
ろくとりつても。交易とりつても。同  
トゆとのみのでござら。それろは  
通用金のおうげで。賣買の道が  
ひし盛よるつこりれど。初ハ唯其  
を同土を村を乃到きこす  
位は賣買で申く遠國同士の賣



買といふはありつゝさかづんく  
世の中が開るは後く百姓の作り  
出すあや職人の製へ出すおも多  
くあり又其仕方巧者よりてあひく  
よい物が出来る振よるつゝゆへ  
譬バ筑前の蠟燭ハ日本一ごの  
土佐の鯉糸ハ全類ごのとつゝ  
振よるつて其を國五六拾里乃る

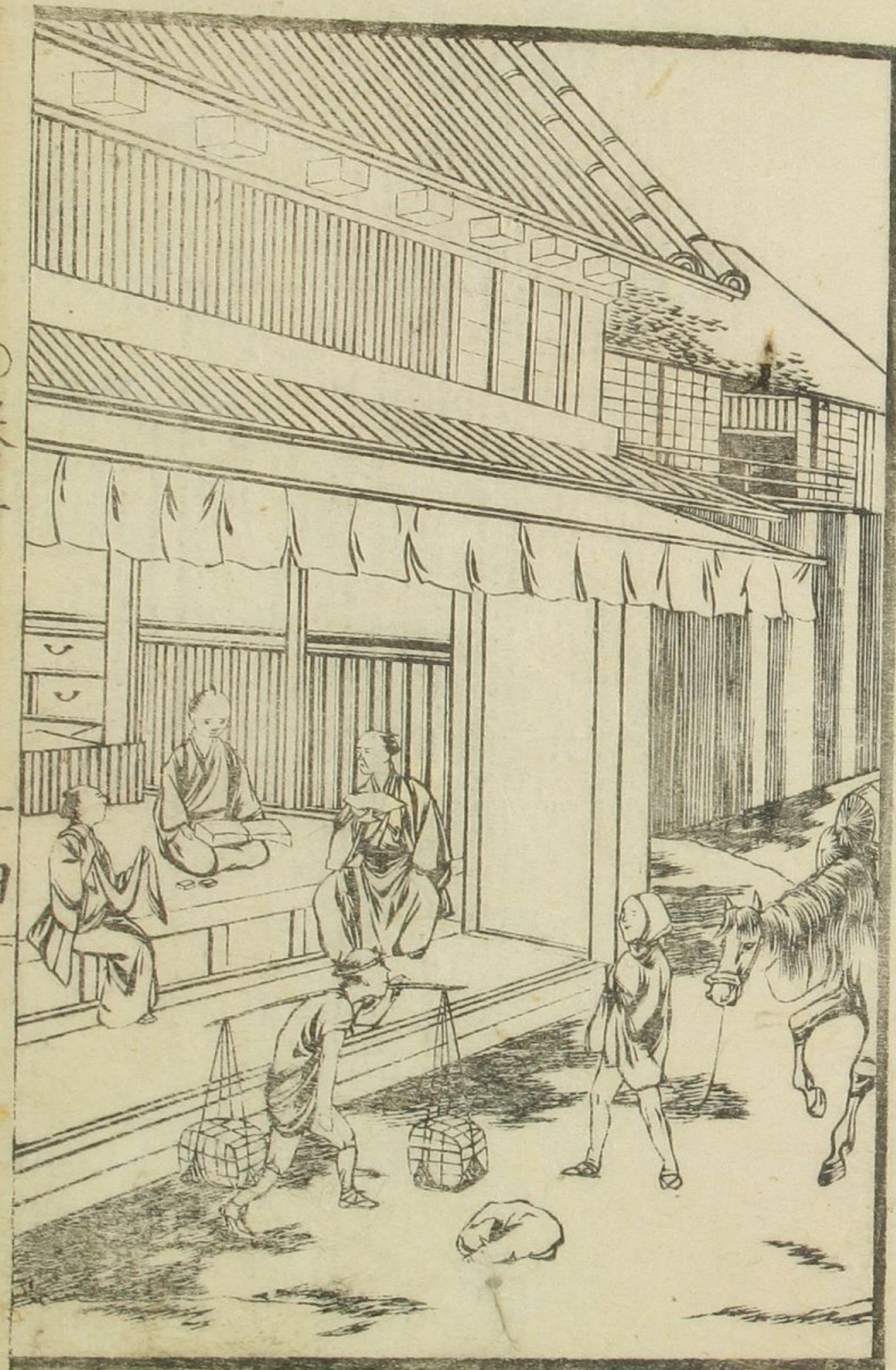
百里余の處りらも買よ来る振  
よるあり。それうらあひく開て大坂  
ごの東京ごの。長崎ごのと。繁花  
る土地ハ國々うら其國產と。船  
やるご持出く。まご化玉うら持  
出ご國產と買く際るとりハ振  
よるつゝさりはごそらうでござる。そ  
らして見逃バ。今西洋人が。彼奴



等が玉の産物と日本も持ち来  
て。又日本の國産を買て降るのも。  
同ド 厚理でござる。何故とらふり  
神様の眼りと御覽るされば。去佐  
や筑前りら。東京や大坂も國産  
と持ち出たのも。英吉利や和蘭も。  
日本も國産を持て来るのも。唯遠  
いとをい申で。何れも變つたことハ

ござらん。矢張彼奴等が國の産  
物や吳羅ハ。日本もあいら持ち  
来て。もう日本のもや糸ハ彼奴等  
が國の茶や糸よりハ。ふぐより  
買て参るのでござる。大きく見れば  
一村一郷の賣買も。関東と西國と  
の賣買も。日本人と西洋人との賣  
買も。かも變つた道理をい。こ





法蘭西より  
 東京へ産  
 物を運送  
 する圖





ごんく 賣買の道が 大く 廣るの  
でござる。それごのよ 西洋人が 日本  
来て 交易するの事。伊の角のといふ  
ハ。日本の人が 是迄 西洋人と 交易と  
仕つけあいで。うらりふ 道理と 知ら  
あいらりのとで ござる。足下 篤と 考  
て 見あさい。と 及 東京や 大坂よ 交  
易と 御開るまつこ 御上の 思召ハ

今 御話 一通で。ごんく 賣買の  
道と 大くして。畢竟 日本 賣体の  
身上と。よくして 下さらりといふ  
市趣 喜ぶうら。誠 難有こを あれ。  
決て 悪く 申上る 存理ハ ありまは  
まい。

頑六

成 祿 足下 の いひ する 所 也。一 意ハ



をる格どが。保足下ハもど醜夷よ  
ごよされく居るさる。何故といふ  
う。と話し通醜夷が来てうら  
日本の徳色がおひく醜夷の邦よ  
出て行く若ごうら。け三四年以來  
といふりけハ。諸色が日くの格よ  
あがつて先刻もいふ通。何でも三  
増倍や四増倍よらうら。いあわ

ごさらん。け上げ候で最早三四年  
も續りけるら。それこそ日本國中  
の若がみんる乞食よらうら。外  
又仕立ハるらうら。と思ふのよ。と  
まけよまう。東京や大坂で交易  
がとひく盛よらうら。バ。僅を  
年々半年半の間よハ。日本の金  
銀や徳色が。えんる醜夷のよ



よむいりてあまつく。結局よハ日本  
の國もども。彼奴等が物りするもの  
のハ必定でござる。ナント才助さん。ま  
でも交易とりふりハあるけれ  
ばらるいれどござる。原腹  
痛いコトけでござる。

才助

それハ頑六君足下がまご本道の道理と

知るさらんく。そんな事とりひる  
さるが。け三四年以來諸色のさる  
つこのハ決して交易の成斗でハるい。お  
よりらく海のある事とござらん。む  
も交易とりふりのハを返始つて俄に  
盛よるらこので。諸色のをけおが  
一旦よ多くるらこので。随分  
それむりでも諸色があがりよ。



相違あひだちござらんが。倭わか先生せんせいの直話とまげと  
まづよ。交易で法はふ色のあがるのハ實じつ  
ハうらゐゆでハるゐ。都みやこて後のちくのうま  
るハよゐいそごそりぞござる。何なに左せ  
といふよ。とも直話とまげす。通とま交易で法  
色のあがつこのハ。え来き法はふ色いろはま  
けくごが多おほくろるのうまのゆで  
ござる。そそごをけりごが多おほく

ふればるるほどえの仕出しだも自みづか然ぜん  
と多おほくろる勤定きんぢやうでそれぞけ日  
本國にっぽん中ちゆうぞ出で来きるふあがふえて  
畢竟ひつじやうハ日本國の身上しんしやうがよよくろる  
のでござるそそごをけりごはあ極ごく極ごく  
しきよぶんくといえの仕出しだが多おほく  
るろく日本にっぽんの法はふ色いろが殖はふてくれ  
バとひくよ居合ゐあが付つてくるろ



自然とまう。諸色がさがつてくる  
のハ眼又見え。道理でござる。うら  
交易で諸色のあぐるのハ一体  
大く目と着て見れば後々乃  
うちよハけ上もろい結構なる。ご  
そうでござる。能考て見ると實  
よそれよ相遠る。い畢竟諸色の  
まけ方が澤山よろる。うら高直

みしても買人がりく。らもある。買  
人がりく。らもある。うら。ふおと仕出  
す人があえてくる。品物と仕出す人  
があえてくる。うら。品あが。ごんく。と  
多くある。品あが。ごんく。と多くある。うら  
てくると。成丈。子。輕。よ。う。ら。へ。と。あ  
でも下。恵。よ。賣。る。根。よ。競。て。くる。そこ  
ぐ。あ。し。く。よ。居。合。が。存。て。諸。色。が。さ



がらゝのハ自然せいぜんの道理だうりはお違ちがごさ  
らんそれごうら今ハまづ交易かうぎの  
始はじつと身みの所ところでまけりこの方が  
滅めつ法ぽう多くて仕出しだの方がまづ割わり  
合あひすくまいうら。是いちをんねん儀ぎら  
所ところごら。是いちをんねん拾と年ねん後のちのゆと  
考かんて見みると。あひくは日本國にっぽんこくの身み  
上かみかうくまら道理だうりで是こゝに結むす構かまる

事ことハるるいのでごさる。い二三年と  
いふりたの田舎いんさがあひひよいき  
るることいふのも。是いちをんねん交易かうぎごらん  
く諸色しよしきのまけ方が多くらうらこら  
のゆでごさるが。まづまづえの仕出しだが。  
違ちがもまけりこの割合割合は多くらうら  
は。諸色しよしきかいくらでもまづくうれり  
ごうら。しハ田舎いんさの方がよくて。町まちを



誠まことは難むづか儀ぎする根ねづか。是こゝがりりも三四  
年ねんも立て。世よの中なかが穩とこよるらふりれ  
るら。元もとの仕し出でかかぶぶええくくと多おほくくららり  
ら。諸しよ色しきの直ちか辰ぢんかかああひひくくと下かつつて参まる  
のハ。眼めよよ忍しのぶぶめめででごござる。儀ぎ是こゝりりハ  
昔むかしの日本にっぽん國內うち才さいの賣う買かひと遠ちかて賣う買かひ  
の道みちかかああひひくくよよ大おほくくららりり。割わりり  
て見みるととななけけ方かたののななりりががどどふふしても

始はじめ終しまひ多おほららふらりり。連つも昔むかしの根ねる下か  
並ならぶ事ことよよハハららりりよよいいけけれれど。其その代しろよよハ  
昔むかしららりりとと西洋せいやう國こくの品しなかかああひひくくととい  
つつててくくるる。又また交かう易ぎかかぶぶええくく感かんよよるれ  
ばばららるるややど。日本にっぽん惣そう俸ほうの身み上あががららりり  
て骨ほね折やれれるる儲たくわでもも出でるる根ね  
よよららりり。京きやうささくくししよよけけれれハハ結むす句く昔むかし  
のの下か並ならぶ時とき分ぶんよりりハハ余あま程ほど著しやく



ふくろふらふ相遠ござらん。田舎と東  
京との事と考て見らるる。東京といふ  
處ハ開こところで諸色が田舎より  
らべてて見てハ減法といふ。余程暮  
よくい道理ごけれど。働さへをれを  
東京など金の儲る変ハるいふ。知  
悉のある奴ハみんる東京よ出て身  
上と大くするでハござらん。それと同

ト事で決して物の中すい変がよい  
場変といふ。目けでハるい。都てあの  
い変など。よく開こと場変でござるうら。  
そらういふ場所でるければ。連も金りふけ  
の出來るりれでハござらん。倅そらうハい  
かりの。交易がむじ。盛よるれば。どふ  
しとも自然と徳色の。下直よるらる  
ければ。うらん道理がさうごさるる。

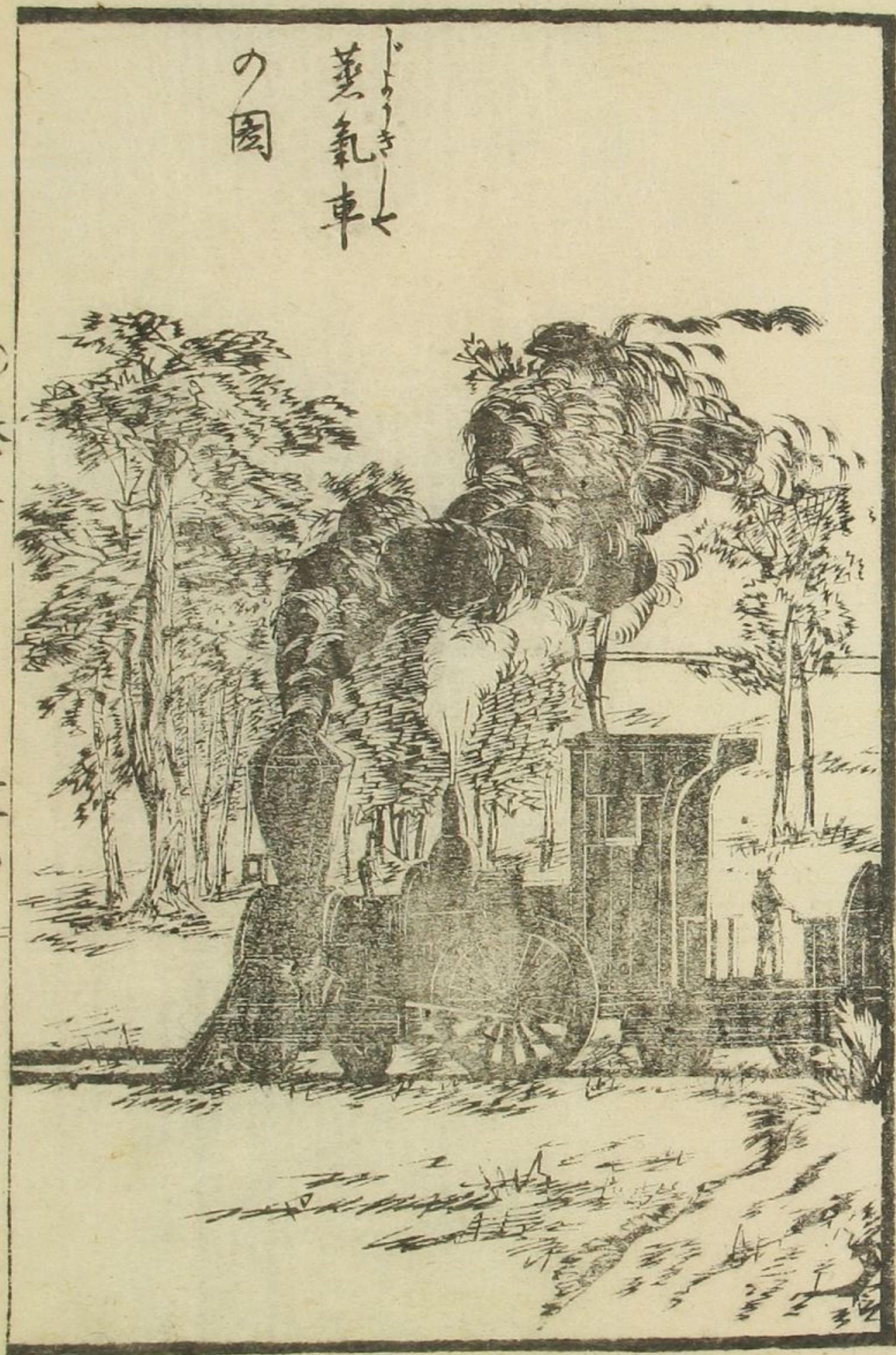


類ハ何ぞといふ又西洋人の方でハを來何  
でも機器仕掛でまゐるものと發明して  
譬へハ稲麦と搗くよも其機器が有  
りれごうら人まいらばよ百石や二百石  
の稲麦ハ僅半時りを時の間よ楽よ搗  
く事も出來る。又物と運送まゐるも  
海よハ蒸氣船陸よハ蒸氣車といふ  
蒸氣の力で走るおがあらつてる王や

二百里の處ハ半日一日よ運送が出來  
る。又遠國同士で紙の取遣よハ傳信  
機といふ機器があらつて百里でも二百  
里でも煙草一服吸るい問り用が  
あつるといふ極る譯でござるうすべ  
て法色の車版も自法と下車りする  
そつでござる。そつといふはごうら後  
西洋人との交際がごんく廣くなれば



トヨウキ  
蒸氣車  
の園





日本ももあひくそんる道具がらつて  
来ら振ももあり。又見習て製る振も  
ありあり。そりるれば諸色が自然と下  
垂よるるのハ分りつた話でござる。す  
べてうりふる程のりはどろろ。交易で  
一旦法色のおぐるのハ決して配する  
よハ及るいふでござる。併又先生のお話  
ときよ。其外法色のるるるのよも

種々があるが。其中も世の中が總か  
らあいので。元の仕がとしく減て。  
諸色のおぐるのと。通用金が悪くる  
つて法色のおぐるのが一変ころいとう  
でござる。往昔西洋國のまじり  
開らつた時分よハまじりの王様が通用  
金とさびく吹替て。どんくよ其真價  
と悪くころあつて。それで法色が格



弁<sup>ひ</sup>又<sup>また</sup>あがつて。滅<sup>めつ</sup>法<sup>ぽう</sup>世<sup>せい</sup>の中<sup>なか</sup>の難<sup>なん</sup>儀<sup>ぎ</sup>よろう  
 ころむがあつて。是<sup>こゝ</sup>が一<sup>いっ</sup>處<sup>ところ</sup>ころむ  
 るで。通用<sup>こんよう</sup>金<sup>かね</sup>が悪<sup>あつ</sup>くよろうて諸<sup>しよ</sup>色<sup>しき</sup>のあ  
 ぐらといふのハ實<sup>じつ</sup>ハ通用<sup>こんよう</sup>金<sup>かね</sup>の美<sup>み</sup>價<sup>げ</sup>かさが  
 つこので。決<sup>けつ</sup>て諸<sup>しよ</sup>色<sup>しき</sup>のあがつて譯<sup>わけ</sup>でハるい。  
 伊<sup>い</sup>故<sup>こ</sup>とりふよ金<sup>きん</sup>路<sup>ろ</sup>の名<sup>な</sup>目<sup>め</sup>ハ古<sup>こ</sup>昔<sup>せき</sup>と變<sup>へん</sup>りか  
 るくつて。譬<sup>ひ</sup>を一<sup>いっ</sup>ドル  
西洋人が交易は用ふる  
通用金の名あり
 一<sup>いっ</sup>ドルといふ名<sup>な</sup>目<sup>め</sup>でありるが  
 とも同<sup>どう</sup>ドルといふ名<sup>な</sup>目<sup>め</sup>でありるが

吹<sup>ふ</sup>替<sup>か</sup>のしびごとよ。其<sup>その</sup>金<sup>かね</sup>の性<sup>せい</sup>がよろう  
 るらつて。今<sup>いま</sup>のま<sup>ま</sup>ドルハ。昔<sup>むかし</sup>の半<sup>はん</sup>ドルも悪<sup>あつ</sup>  
 らるい位<sup>くらい</sup>よろうな。昔<sup>むかし</sup>ま<sup>ま</sup>ドルで賣<sup>う</sup>る  
 物<sup>もの</sup>ハ。とでハ二<sup>に</sup>ドルも三<sup>さん</sup>ドルも賣<sup>う</sup>る  
 けれハ。昔<sup>むかし</sup>のま<sup>ま</sup>ドルの金<sup>かね</sup>と取<sup>と</sup>つて割<sup>わり</sup>する  
 らるいりれぶら。聞<sup>き</sup>く所<sup>ところ</sup>ハま<sup>ま</sup>ドルのあ  
 が二<sup>に</sup>ドルも三<sup>さん</sup>ドルもよろうな。松<sup>まつ</sup>さけれど。  
 突<sup>つ</sup>ハ何<sup>なに</sup>も諸<sup>しよ</sup>色<sup>しき</sup>の相<sup>あ</sup>場<sup>ば</sup>があつて。



である。打て通用金の真價まねがさうなる  
 のでござる。但一ドルといふ金の真價まねが今ハさうなる  
 ことよ、あうは唯是ハ喻よりよさうなり  
 夫れ日ひの松まつは徳色とくしきの相場あひらがくるつて  
 中ちゆうに交易かうぎで徳色とくしきのあがる松まつさうで  
 あり。誠まことに世よの中ちゆうの難儀なんぎといふは  
 金通かねとゆうの事ことであるつてさうでござる。  
 儀ぎ王様おうさまの威い光こうさうら。金銀きんぎんの性しやうと  
 悪わるく志こころ中ちゆうりと善よく志こころ中ちゆうりと。揚あつ子こ以もて  
 牙が

であるといふは、あやういとつてお  
 寄よ法ほうる政道せいどうで。實じつハ國くにの衰微すいびと招まねく  
 松まつさうれでござる。ちもけ松まつさうら昔むかし  
 開ひらけさうらつと時とき多おほのふで。當あ時ときハ昔むかし松  
 さうらであるさうでござる。すべてあつり  
 いかしけさうら。諸色しよしきのあがるのよも善よ  
 悪わるがあらつて。交易かうぎで徳色とくしきのあがるのハ  
 後のちに玉たまが開ひらけて。さうくと身上しんじやうのよく



るるるる。又世の中が穩とんるるるるいで徳  
色しきのあがるのと。至しの性しやうがらるるるる  
諸色しよしきのあがるのハ後のちく世よの中ちゆうの難なん儀ぎ  
が培つちかへ。と國くにの貧びん乏ぼうはよるるるる  
ぶるるるるでござる。

頌六

足下とくの講釋かうしやくハよく口くちりやうく。成なる世よ  
の中ちゆうが穩とんるるるるいで。徳色とくしきのあがる

のト。至しの性しやうがらるるるるるるるる  
のあがるのハ。實じつよく近ちかもるるるるる  
るよ相遠あひあるるる。交易かうぎで徳色とくしきのあがる  
のハ足下とくのしひるるるる通眼とんがん前まへのハ  
は。後のちくも後のちくも。後のちくも。後のちくも。後のちくも。  
のでござらるる。併とま足下とくよく考かんて見る  
さい。  
神武じんぶ以來いらい拾しゆ二に三さん年ねんあ  
まで。凡みな武ぶ子こ五ご六ろく百ひやく年ねんとらるる。何

卷上  
三十八



きつ醜夷けいとうのさうら取ふせばとも困こまつ  
ふゆのさういけ日本國でハとさざらんり。  
それどのよとさるつて。伊も急いさ又また爰あ  
のさうあさふふよ。さうりらうさく交  
易とちどめらるよハ及およぶゆでござる。  
尤なほ往昔むかし太閤たか様さま時とき分ぶんも。醜夷けいとうが来き  
て交易こうぎしるゆもあり。又また其その後のちも長なが  
崎さきハ毎年まいねん和蘭わらん人ひとや支那しな人ひとが来

て。交易こうぎしるけれど。是こゝハ日本にっぽんよりさく  
つて困こまるといふふと持も執としといふで  
ハるい。いと解と計けいるよとでござる。成な社しゃ  
是こゝ中ちゆうのいひるさる通と醜夷けいとうと交易こうぎと  
ちどめられバ。諸しよ色しきのちけりさが多おほく  
るもさうら。一旦いつたんハ諸しよ色しきがあがるが。そ  
れでさうの自みづか然ぜんと元もとの仕し出でが多おほくなる  
つてくるよ。從したがく。さうら諸しよ色しきさか



澤山さわさんよるつて持こでやうさあひく  
 壺ね辰ざんささぐるりら。交易で徳色の  
 あがるのハ。いふよお遠もるら  
 ぶん。俵丸で初ら交易と志るけ  
 れバ。徳色が始終しじう下壺やまるり又居す  
 ころつて居るりら。其方が猶よいでハ  
 ござらんら。それとも日本が醜夷  
 の玉うら。徳色と買入かひいるけれハ活計かっけい

が立たまうといふ國くにらるバ。それも仕  
 方かたらういふ。ともいふ通と醜夷しういの國くに杯さい  
 とハ遠とほて。日本國內にっぽんの徳色で。十分よ  
 暮くせらる玉たまでありらるら。醜夷しうい又款かれ  
 て。交易と盛さかよ志しやう杯さいといふハ。い  
 らよも乃な腹はら痛いたいふでハござらんら。

才助

頑六君がんりく足下あしもとの理り窟くつハ一向いこうりりよせ



ん。尤も足下ハ偏屈る先生の話と聞馴  
く居るさうなり。僕等のりふ事ハ  
此も。足下の身よハたいていさしけれ  
ど。先ツまの僕の愚論と述ませり。  
カガ併何時までもへらくと志やべり  
つて事よして居てハ看官諸君が此  
急屈るさつと。才助とりふ奴ハ  
名もあもも似合ん。氣のさつとさし

珍事ごと。此れりさるるでござ  
らふりら。先ツけ迎で一服中りりして。  
跡ハ下の巻で話すぐとさるる



井上

交易問答卷之上 終

明治八年  
五月十日

大谷氏

井上



